



命を守る防災体制の構築と インクルーシブな防災学習の推進



兵庫県立和田山特別支援学校
主幹教諭 柳本 真一

1 はじめに

本校は兵庫県中部に位置し、天空の城で名高い竹田城の麓にある知肢併置の特別支援学校で、小学部から高等部の児童生徒 43 名が在籍しています。

地震についてはこれまで直接的な被害を受けていないため、本校の防災学習や防災体制もどこか他人事で形式的な状態でした。平成 26 年に車いすの生徒 A さんに「もし今地震が起きたらどうしますか」と尋ねると「机の下に隠れます」と答えました。A さんは車いすに乗っているので自分で机の下に隠れることは困難です。教わったとおり返えただけなのですが、このことから本校の防災教育に問題があることに気がつきました。自分の命を守ることができないので防災教育の目的を果たすことができません。決まった避難行動の形や「おはしも」といった定型の言葉さえ守っていればあたかも安全であるかのような「考えない防災教育」に問題があると考え、本校の防災教育や防災体制の改革を始めました。本校の児童生徒は全員災害時要援護者で一人ひとり必要な支援も配慮も異なります。しかし、障害の有無に関係なく防災教育の目的や本質は変わりません。防災の目的や本質を考えた指導や全体や個々に応じた配慮をしていくことが必要であると考えています。次に本校の取組の一部について紹介します。

2 防災体制の見直し

平成 28 年 10 月に鳥取中部地震が発生し、本校では震度 3 の揺れがありました。滅多に地震が起こらないため騒然とし、避難するかどうか迷った職員が指示を求めて教頭に詰め寄りということがありました。結局避難することなく終わったのですが、どうすべきだっ

たのか課題が残りしました。そこで、避難の基準を「震度 1 でも揺れたら逃げる」ことにしました。「地震が起こると危険なので避難し、安全を確保する」というほうが子どもたちにとっても分かりやすいことや基準が明確なので放送など指示に頼らず、素早い避難行動をとることができます。その後、結果的に何も起こらなくても、安全が確保される意義は大きいと考えます。

また、本校は校区が兵庫県全域に及ぶため保護者への連絡体制も重要です。4 月当初に気象警報発表時の対応や震度 5 弱以上の地震発生時の対応、災害伝言ダイヤルの使用方法、引き渡し方法、南海トラフ地震に関連する情報（臨時）等をラミネートした文書で配付するなど対応の周知徹底を行っています。

特別支援学校ならではの防災体制としては常用葉の保管や電源確保の問題があります。命に関わることもあるからです。帰宅困難にも対応できるよう学校で 3 日分を目安とした葉の保管をしています。また、非常用電源については自家発電機とソーラーパネルで対応できます。

3 PTA との連携

本校は P T A との連携にも力を入れています。児童生徒・職員全員分のヘルメットとアルミシート、非常食を購入しました。しかし、非常食は高価であるため、個人用備蓄として防災リュックを家庭で準備するよう切り替えているところです。持参するものは食料品、飲料水、おやつ、落ち着けるグッズ、その他必要なものとし、学期ごとに点検することにしています。

P T A とは災害時の連絡方法についても検討しました。災害伝言ダイヤルの活用を学校としては整備していましたが、これに加え、

P T A一斉メールと「和特防災ライングループ」が作られ、三重の連絡体制を構築することができました。

また、現在は災害や万が一のときに備えて児童生徒が通学カバン等に携帯する「SOSカード（仮称）」の作成の取組を進めています。

4 防災教育の取組

本校では年4回の緊急地震速報ショート訓練と年2回の防災学習（避難訓練含む）を行っています。緊急地震速報ショート訓練は緊急地震速報を聞いて退避行動をとり、整列するまでを行います。

避難訓練については以前「おはしも」の標語やシェイクアウト訓練やダンゴムシのポーズを取り入れていました。これらを改め、その場の状況判断をするように変更しました。危険から身を守るのに標語や行動パターンを徹底することが目的になってはならないからです。安全の確保は状況によって手段が異なるし、「考えない防災教育」は状況の変化に対応できません。防災教育の本来の目的は「身の安全や命を守ること」であるはずで、手段が目的となってはなりません。一般的に行われている事であっても慣習的であったり、本来の意味が失われている場合があるので見直しをしながら子どもたちの指導をするべきであると考えています。

本校では防災学習を6月と1月に学校行事として行っています。6月の防災学習は緊急地震速報を活用した避難訓練と寸劇、非常食体験を行いました。従来のような計時や講評は行わず、子どもたちが主体的に「考える



避難訓練



防災体験プログラム

こと」を大切にしています。

1月には防災体験プログラムを実施しています。地域人材や企業等の協力でブースを設け体験活動を行う、さながら防災フェスのような行事です。この行事は協力者も含めた会場にいる全ての人にとって学びになることをねらっています。体験が中心であるため、大人や子ども、それぞれの立場で感じ方はそれぞれ異っても、学びの質は変わりません。体験を通し、それぞれの学びが生まれています。

5 おわりに

防災教育は、たった1回の災害で命を落とさないようにするための知識や技術を「考える防災教育」から身につけさせること、自他の命を大切にするとともに助け合いや思いやりの心を育むことの両輪で進めることが大切です。「誰一人取り残さない」ということとも調和します。

災害時は誰もが困難さを感じます。そのことは「障害」のとらえ方と同じであると考えます。適切な支援や配慮がないことで「生きづらさ」や「障害」が生まれます。障害は本人にあるのではなく、その人の周りの環境にあると考えれば、被災すれば誰もが「障害」のある状態になります。障害の有無にかかわらず、誰一人取り残さない、可能な限りの配慮がなされることが当たり前になる社会になっていくことを期待し、取組を進めていきたいと思っています。